

「体験交流活動を中心としたコースにおける自律学習支援とポートフォリオ」

国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員

石井容子

国際交流基金関西国際センター日本語教育専門員

熊野七絵

キーワード: 体験交流活動、短期訪日研修、自律学習支援、ポートフォリオ

1. 背景と目的

1.1 体験交流活動を中心とした短期訪日研修

国際交流基金関西国際センター（以下 KC）で実施している日本語学習者訪日研修（大学生）は、海外のさまざまな大学で日本語を学ぶ初級修了から中級程度の学習者を招聘し、日本語学習及び日本文化・社会理解を深めるための機会を提供する6週間の研修である。短期の訪日機会を最大限生かすため、文法や漢字の項目学習ではなく、1) 学習してきた日本語を使う、2) 日本を体験し理解する、3) これからの日本語学習に役立つ発見をする、の3つを目標とし、体験や交流を中心とするカリキュラムを組んでいる。体験交流活動型の日本語学習は、1) 事前に教室で、必要な日本語表現や行動のストラテジーを身に付け、2) 現実の場面で課題を遂行するために日本語を使い（体験・交流）、3) そして事後に体験したことを教室で日本語でまとめる、という流れで行われる。活動には、大学生との交流会や小学校訪問、ホームビジット、文化体験などがあり、日本語科目はそれと関連した形で進められる。そしてここでの学びを、帰国後の継続学習へつなげることを目指している。

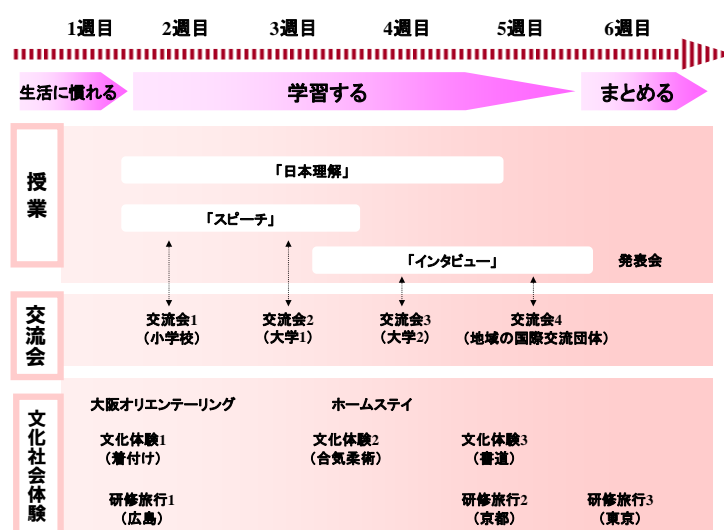


図1 体験や交流を中心とする大学生訪日研修の全体像（熊野2008参照）

1.2 KCにおけるポートフォリオ評価と自律学習支援

1.2.1 ポートフォリオ評価

このような、体験や交流を重視したコースにおける評価の方法として、テスト等による数値評価、成績よりも、各自が自分なりに学んだ成果や変化を重視したいと考え、以下①～⑤をまとめたポートフォリオを評価としている。

- ①「研修の目標と内容」：研修の目標と、研修内容（日本語授業、日本人との交流、社会体験、文化体験、発表会）を一覧にしたもの（日本語版と英語版）。
- ②「自己目標・自己評価シート」：研修開始時に、a) 日本語学習について、b) 日本での体験について研修参加者自身がそれぞれ自己目標を立て、研修終了時にそれに対する自己評価を行うとともに、c) 帰国後の継続学習の目標を記述したもの。
- ③「研修活動の記録」：1週間ごとに自己の日本語学習や日本理解を振り返り記述する「研修活動の記録」計6回分。
- ④「成果物」：日本理解科目まとめレポート、スピーチ発表会原稿、インタビュー発表会原稿と視覚資料（パワーポイント資料か配布レジュメ）。
- ⑤「教師からのコメント」：担当教師からの研修参加態度や日本語能力面、日本理解面についての所見、今後の学習に向けてのアドバイスを記述したもの。
- ⑥「自己評価チェックリスト」：CEFRに基づき日本語授業や活動に関連する遂行課題を研修に合わせてカスタマイズした能力記述のリスト。

1.2.2 自律学習支援

体験や交流が中心となるコースでは、学習者が自主的な活動を行うため、また帰国後の継続学習へ繋げるためにも自律学習の意識化が必要となる。しかし、研修参加者には教師主導に慣れ、またそれを望む比較的受け身な学習者が少なくない。そこで、彼らが研修中のさまざまな活動に主体的に取り組み、自律的な学習者となっていくことを目指し、さまざまな自律学習支援の仕組みを設定している。仕掛けには、学習者自身による「自己目標設定・自己評価」、「研修活動の記録」、「自己評価チェックリスト」、教師との個別の「学習相談」やクラスメートとの「週フィードバック」「学習の振り返り」の時間などがある。

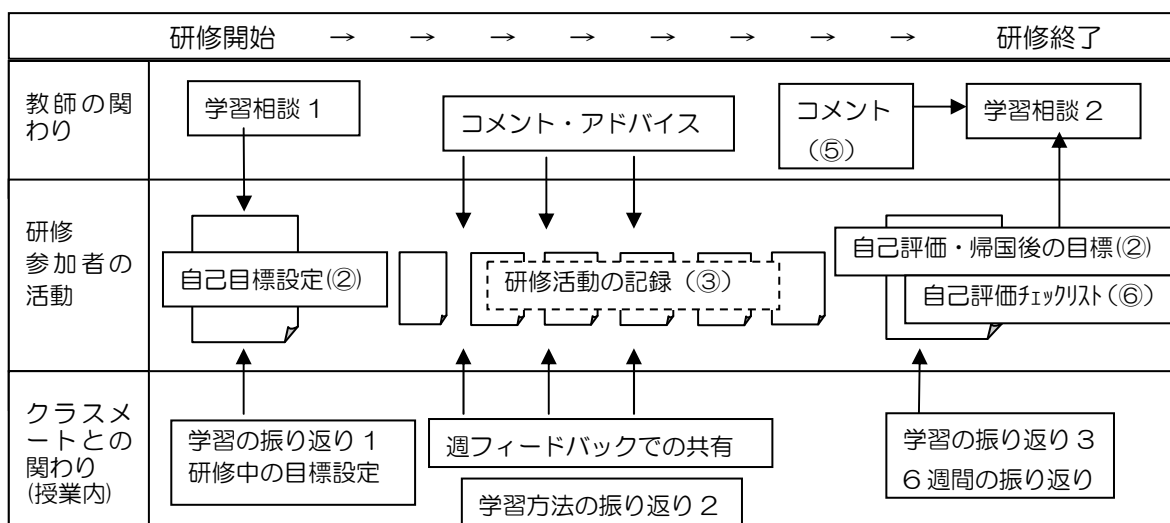


図2 自律学習支援・評価の全体像

これらを研修の流れに沿って確認する。学習者は、研修開始時にまず教師やクラスメートとの話し合いの中から研修中に達成したい日本語と体験についての自己目標を立てる。その後、週に一度、各自で一週間の活動や体験を振り返って「研修活動の記録」を書き、その活動記録をもとに、気づきを共有しあう「週フィードバック」の活動を行う。「研修活動の記録」には、教師がコメントやアドバイスを記述する。研修終了時には、教師やクラスメートと共に記録を振り返りながら自己評価を行うとともに、「自己評価チェックリスト」での確認も行い、研修終了後の継続学習の目標を立てる。

1.3 JF スタンドアートのポートフォリオ要素とKC ポートフォリオの関係

JF スタンドアートにおけるポートフォリオの要素としては、「評価（ものさし）」「言語的・文化的体験の記録」「学習の成果」があるが、KCで行っている仕掛けと照らし合わせると以下のような対応となる。また、これら全てがKC ポートフォリオの要素となっている。

- ・評価（ものさし） → 自己評価チェックリスト（⑥）
- ・言語的・文化的体験の記録
→ 研修の目標と内容（①）自己目標・自己評価（②）、研修活動の記録（③）、週フィードバック（③）、教師からのコメント（⑤）
- ・学習の成果 → コース中の成果物（④）

1.4 本発表の目的

本発表では、ポートフォリオを効果的に活用するための4つの仕掛け（「自己目標設定・自己評価」「研修活動の記録」「週フィードバック」「自己評価チェックリスト」）を紹介するとともに、それぞれの活動がどのような役割を果たしているのかを検証することを目的とする。また、そこからポートフォリオをコースに導入する際の効果的な活動のデザインのポイント、そしてポートフォリオの可能性について考察する。

2. 方法

分析データは研修実施中、また研修後に収集した以下の資料である。2006年～2009年に大学生を対象とした複数の短期訪日研修における資料を対象とし、アンケートは学習者102名から回収したものである。

- ・学習者の「自己目標・自己評価シート」「研修活動の記録」等の記述
- ・週フィードバックのディスカッションの流れ等のメモ
- ・自律学習支援の仕掛けに関する学習者へのアンケートや聞き取り調査の結果（「研修活動の記録」「週フィードバック」「自己評価チェックリスト」について）
- ・学習者の帰国後の所属大学からのコメント

3. 結果

3.1 自己目標設定・自己評価—日本語と文化の個々の目標を設定し評価する—

「自己目標・自己評価シート」は、図3のような一枚のものである。学習者は、研修開始時に「日本語」「体験」それぞれの自己目標を、修了時に目標毎の自己評価と帰国後の目標を記入する。教師が設定した目標ではなく、学習者個人による目標設定は、交流や体験を中心とする研修において主体的に活動に取り組むための意識づけとなる。

3. この研修での自己目標と自己評価

	この研修でしたいこと	できたこと
日本語	<ul style="list-style-type: none"> 日本の新聞を言葉の多様に習ったこと。 日本の生活の大切さを言葉と文化を学ぶこと。 一人で日本人と会話すること。 自国のことを日本人と会話すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の新聞の言葉、文化の多様性を学ぶことができた。 日本の生活の大切さを言葉と文化を学ぶことができた。 一人で日本人と会話することができた。 自国のことを日本人と会話することができた。
体験	<ul style="list-style-type: none"> 日本人と日本文化について学んだこと。 日本の言葉と文化の多様性を体験すること。 日本の有名な場所を見学すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ホームステイの経験を通じて日本人と日本文化について学ぶことができた。 日本の言葉と文化の多様性を体験することができた。 日本の有名な場所を見学することができた。

国に帰ってから、何をしたいですか。
国に帰ってから、二年間毎日日本語を勉強したいです。
そのうち日本語能力試験の合格を目指して、日本の大学に留学したいと考えています。

図3 自己目標・自己評価(例)

また、自己目標を考える際には、上述の通り教師やクラスメートとの話し合いが行われており、それぞれの目標を共有することが、研修中に相互に励ましあったり、目標へのリマインドを促したりすることにつながっている。

そして、自己評価は、自身が立てた目標に対して行われる。目標を共有したクラスメートと共に研修を振り返り、相互にアドバイスをしながら自身の目標をどのように達成できたかという評価を記述し、帰国後の自己目標を新たに立てる。

日本語と体験という枠組みで目標を設定することにより、課題遂行能力、異文化理解能力の両方を評価することが可能という点で、自己目標の設定と自己評価は、体験交流活動を中心とする日本語研修を支える役割を果たしている。

3.2 研修活動の記録—個人の自省と変容を記録する—

「研修活動の記録」は、ある特定の授業を対象とするものではなく、研修全般及び日本での生活の中での気づきを「日本語、体験、生活」の3つの観点からまとめ、それぞれに具体的なエピソードや考えを交えて記述するものであり、学習者が自省活動に慣れることを狙いとしている。

石井・熊野(2008)では、この「研修活動の記録」をもとに、学習者の日本語や日本文化・社会への気づきがどう変化し、「自己評価」にどのような影響を与えるかを分析し、個人内の変容の過程を検証した。

日本語面では、学習者は自省を繰り返す中で、日本人の生きた日本語や学習者自身の日本語運用能力への気づきから、帰国後の目標へつながる記述へと自省を深めていた。また、社会・文化面では、体験・交流や生活の中での気づきを繰り返しながら、独自の視点で考察を深め、新たな日本観を作っていく様子が窺えた。

ID番号 _____ 名前 _____

4. 研修活動の記録

2007年6月21日(月)～5月27日(日)

★活動記録は毎週月曜日の朝の先生に渡してください。

★この1週間、気づいたことを一言で書きましょう。

1. 日本語について気づいたこと

今、日本の生活で、漢字をよく覚えています。

2. やってみたい気づいたこと

苦手で英語は分かりやすく、年より英語は分かりにくい。どうしようもない。

3. 生活の中で気づいたこと

大阪の人はずっと「おはようございます」と挨拶して聞かれました。

★1～3について、考えたことを詳しく書きましょう。

★この「気づき」を振り返り、学習者としての成長に結びつけたい。この「気づき」を振り返り、学習者としての成長に結びつけたい。この「気づき」を振り返り、学習者としての成長に結びつけたい。

図4 研修活動の記録(例)

日々の発見や驚きを定期的に記述させることが、言語や文化について見つめ、考察する姿勢を作り、また、それを振り返ることが最終的な「自己評価」へ繋がっていくことがわかった。このように「研修活動の記録」は個人の自省を深め、その変容を記録する役割を果たしている。

3.3 週フィードバック—多様な視点から異文化理解能力を養う—

「週フィードバック」は、3.2の「研修活動の記録」で個人が記述した内容を、学習者同士で話し合い共有する活動である。毎週初めの授業で研修参加者全員が集まり、4、5名のグループ内で、「研修活動の記録」の記述内容の共有とディスカッションを行い、その後、グループ内での話し合いを全体に向けて発信し、全体でのディスカッションを行っている。また、この活動を通して考えたことは週フィードバック後に再度個人で「研修活動の記録」に記述される。

石井・熊野（2009）では、週フィードバックの流れや週フィードバック後の記述を分析し、週フィードバックが5つの役割を果たすことを検証した（図5参照）。まず、グループ内で個々の体験や意見をシェアする活動では、同じ意見によって共感・確認したり①、違う意見によって新しい情報や視点を得る②。また、その後グループ内でいろいろな意見が出たり、全体でのディスカッションに発展したりする場合は、多様な視点から言語や文化のイメージに揺さぶりがかけられることで、ステレオタイプ化の防止の役割を果たし

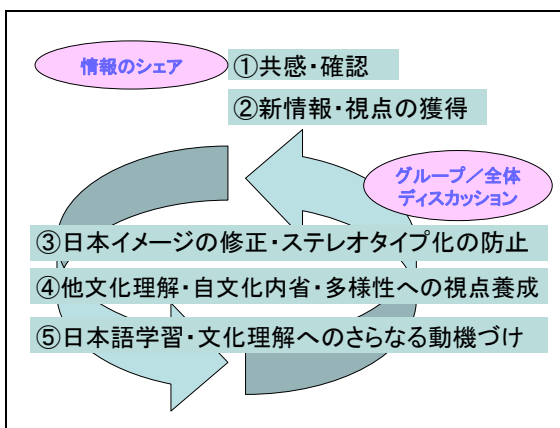


図5 「週フィードバック」の果たした役割

たり③、日本に留まらない他の国々の事例や意見から多様性に気づく視点を養ったり④、他者の声から各自の日本語学習や文化理解についてのさらなる内省の促しや新しい目標への動機づけにつながる⑤ことがわかった。これらの役割を通して、学習者は、日本の中の多様性、自文化・言語への内省、他文化・言語への気づきという異文化理解能力を獲得している。

3.4 自己評価チェックリスト—課題遂行能力を確認し、継続目標を設定する—

項目	達成度	備考
1. 研修内容の理解		
2. 研修内容の活用		
3. 研修内容の共有		
4. 研修内容の振り返り		
5. 研修内容の応用		
6. 研修内容の発信		
7. 研修内容の継続		
8. 研修内容の発展		
9. 研修内容の活用		
10. 研修内容の共有		
11. 研修内容の振り返り		
12. 研修内容の応用		
13. 研修内容の発信		
14. 研修内容の継続		
15. 研修内容の発展		

図6 自己評価チェックリスト

「自己評価チェックリスト」は、JFスタンダードの要素のひとつ「評価（ものさし）」に相当するもので、CEFRの記述に基づいて、研修に合わせて作成した。交流体験型の研修は、日本語能力の伸びを測ることが目的ではなく、また、研修開始時にこれから開始する活動に関連する日本語能力を自身で判断することは難しいため、能力記述のチェックは研修終了時のみに行った。また、体験交流型のコースであることから、記述は、「書く」「聞く」「話す」といった技能別ではなく、「交流（交流会、ホームビジット）」「生活（研修旅行など）」等の活動や、「インタビュー」「スピーチ」といった日本語科目とそれに伴う活動毎にまとめた。例えば図7のように、各科目における遂行課題を

A2 から B2 までのレベルごとに段階的に示した。これは、学習者が継続目標を設定する助けともなる。このように、自己評価チェックリストは、日本語の課題遂行能力を内省し、継続目標を設定するという役割を担っている。

インタビュー		A2	B1	B2
インタビュー準備	1	インタビューに必要な簡単な質問文が作れる。	インタビューの流れに沿った適切な質問文が作れる。	インタビューで必要な情報を収集するための論理的な簡潔な質問文が作れる。
	2	インタビューで準備した質問を、相手の話したことを確認できる。	準備してインタビューを行い、答えに合わせて次の質問ができる。	インタビューをなめらかにこなせる。面白い答えを取り上げて、用意した質問を意図的に変えるなどしてさらに興味深い答えを引き出せる。
インタビューする	3	あいづちを打ち、聞いていることを相手に示すことができる。	自然に適切なあいづちを打って、会話をスムーズに進められる。	パリエーションのあるあいづちを適切に打ち、相手の話を引き出すことができる。
	4	インタビューをしながら、キーワードがメモできる。	インタビューをしながら、キーポイントがメモできる。自分で見てわかるメモが取れる。	インタビューの重要な点をノートに取ることができる。
	5	インタビューのテープを聞いて、キーワード、表現、発音が	インタビューのテープを聞いて、キーポイントを理解し、	インタビューのテープを聞いて、必要な情報を発音し、

図7 「自己評価チェックリスト」記述の一部

4. 考察

4.1 ポートフォリオの効果的な活用のための活動のデザイン

3では、ポートフォリオを効果的に活用するための4つの仕掛けについて概観し、それぞれの活動の役割について確認した。これらの活動は、それぞれ独立するものではなく、有機的に結びついているため、活動を単独で表面的に取り入れても効果的ではない。効果的な活動のデザインとはどのようなものなのか。

まず、自己目標、自己評価について。教師主導に慣れた学習者にとって、目標を設定したり、自己評価を行ったりすること自体、容易ではなく、「日本語が上手になりたい」といった漠然とした記述しかできないことが少なくない。そこで、単に目標を書かせるのではなく、コースの概要を把握させること、また、教師やクラスメートとの話し合いの中で自身の目標を意識させ、内省させる時間や仕掛けが必要となる。話し合いの中で、研修中にできることを具体的にイメージし、どうしてその目標を立てたのか、そのために何をしようと思うか、目標はどうやって達成したのか、などを掘り下げ、内省を深めることによって初めて具体的な自己目標設定や自己評価が可能となる。自己評価には、前述の通り「研修活動の記録」もまた、大きく関与する。毎週の記録の記述は、内省活動に慣れるという重要な意味を持つとともに、そこでの記述が自己評価につながっていく。

次に、「研修活動の記録」と「週フィードバック」について。「研修活動の記録」は、意識しなければ通り過ぎてしまう日本での体験を振り返り、内省を促すために必要であるが、それを更に深め、多様な視点から捉えるために「週フィードバック」は切り離せないものである。また、「週フィードバック」にとっても、「研修活動の記録」はその活動の前提となるものである。記録なしに、個々の体験を共有させても単なる感想の共有に留まってしまふからである。「研修活動の記録」では、日本語学習や日本文化理解といった目標に直接つながる点に限るのではなく、「日本語」「生活」「体験」というゆるやかなポイントから、広く言語や文化を取り巻く事象を、学習者個々の興味や視点から観察するように促し、週末に体験の中で観察し気づいたことを振り返りながら内省し、自分なりに考察を深める時間を提供している。「週フィードバック」では、気づきの発信の機会を設けるとともに、より多くの意見に触れるよう、ディスカッションを繰り返す場を設定している。また、その週

程で考えたことを記述させることで学習者の再内省を促している。

図8に示すとおり、この「個人の内省→他者との共有・ディスカッション→再内省」というサイクルを繰り返すことは、言語や文化への理解を深め、多様性や柔軟性といった視点を養う上で重要なポイントである。

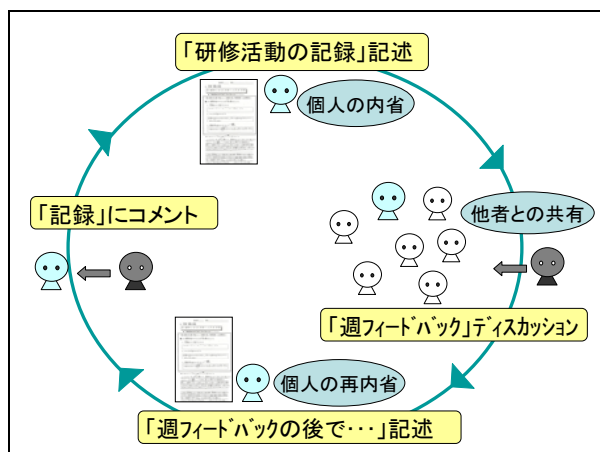


図8 活動のデザイン（内省と共有のサイクル）

また、これらの活動において教師は支援者として重要な役割を担っている。学習者間の共有やディスカッションが表面的なものに留まらないよう、多様性を意識させたり、背景の考察を促すコメントを投げかけたりして全体のディスカッションをサポートするほか、学習者個人の目標を踏まえながら、内省と考察をより一層深めるための助けとなるよう「研修活動の記録」へ個別にコメントを記述している。

このように、ポートフォリオの効果的な利用のためには、個人の内省と、学習者間や教師との共有とディスカッション、個人の再内省というサイクルと、それを教師が引き出し支えることが重要である。

「自己評価チェックリスト」については、学習者個人が内省して記述した後、学習相談の中で教師と共に確認した。しかし、このような活動に慣れない学習者にとっては、能力記述をチェックすることは、容易ではなかった。上述の活動と同様に、学習者間でのディスカッションを取り入れ、同様のサイクルの中で活動を行うことで学習者の負担は軽減され、より意味のある活動となる可能性がある。

4.2 ポートフォリオの可能性

本実践からポートフォリオの可能性として、以下の5点を指摘したい。

- ・活動中心のコースに適した評価ツール
 - ・言語だけでなく文化も評価できるツール
 - ・個人の学習や体験の内省と変容を記録するツール
 - ・個々の課題遂行能力レベルの確認と継続目標設定のツール
 - ・学習者、教師、送り出し機関の対話のツール
- }

評価ツール
- }

内省ツール
- }

対話ツール

まず、ポートフォリオはこれまでの数値評価では実現することの難しかった学習者の主体的な「活動」や「文化」（課題遂行能力・異文化理解能力）を評価に組み込むことができ、またそれに重きをおくことができるという点で、新しい評価の視点を開くものである。

また、個々の内省と変容の記録となり、個々の能力確認や目標設定の助けとなるという点でより自律した学習者へと導く内省ツールともなっている。

そして、ポートフォリオに含まれる各要素は、コース中の各活動段階で教師や他の学習者との対話ツールとしての役割を果たしている。また、帰国後は、空間を隔てた所属大学の教師にとって、学習者が訪日中何を学び、体験し、どのように成長したのかを知るツールとしても評価されてきた。そして、学習者が所属大学の同級生や後輩達に訪日中の学習や体験を語る時に使うツールとしても役立っている。

このように、KC での実践の中で、ポートフォリオは JF スタンドの目指す「課題遂行能力」と「異文化理解能力」の習得のプロセスの記録や評価に適した方法であり、またポートフォリオやそれを支える仕掛けが「内省と対話のツール」として機能していたことを検証することができた。ポートフォリオは日本語教育スタンダードの導入において、その理念に合ったこれまでにない視点や広がりをもたらすツールとして大きな可能性を秘めているといえるだろう。

参考文献

<文献>

石井容子・熊野七絵（2008）「日本語・日本文化社会への気づきを促す「研修活動の記録」－自律学習の意識化を目指して－」WEB 版『日本語教育 実践研究フォーラム報告』1-10、日本語教育学会

石井容子・熊野七絵（2009）「言語と文化への気づきを学習者間で共有する活動が果たす役割－「研修活動の記録」と「週フィードバック」の分析から－」『リテラシー研究集会2009複言語・複文化主義と言語教育予稿集』92-97、リテラシー研究会

熊野七絵（2008）「大学生短期訪日研修における体験交流型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』第18号、31-46

熊野七絵・品川直美・羽太園・田中哲哉・矢澤理子・西野藍（2009）「短期訪日コースのための教材開発－『日本語ドキドキ体験交流活動集』－」『国際交流基金日本語教育紀要』第5号、135-149

<教材>

国際交流基金関西国際センター編（2008）『日本語ドキドキ体験交流活動集』凡人社

<ウェブサイト>

国際交流基金関西国際センター「KC クリップ」<<http://jfk.jp/clip/>>2009年9月1日参照